

# 読書のすゝめ

その16 H30 6/22

## 6月23日は沖縄慰霊の日です

沖縄戦における20万人を越す戦死者のうち、約半数に近い、じつに9万4千人余りの戦死者が、兵隊以外の一般県民や子供です。この沖縄戦で、沖縄防衛第三十二軍司令官牛島満中将と同参謀長の長勇中将が糸満の摩文仁で自決した日が昭和20年6月23日の未明とされていくのです。そしてこの日を、日本軍の組織的戦闘が終了した節目としてとらえ、沖縄慰霊の日が制定されました。

毎年この日は、糸満市摩文仁の平和記念公園において「沖縄全戦没者追悼式」が行われ、正午の黙祷などにより戦没者の御霊を慰めるとともに、世界の恒久平和を願う沖縄県民の思いを世界に発信しています。また同時に、沖縄県内に散在する各地の慰霊塔などでも一斉に慰霊祭が行われます。

戦争体験者が少なくなる中、今もなお沖縄県内には大量の不発弾が残されており、爆発事故が後を絶ちません。手榴弾などはさびついてひび割れた状態で、住民の目に触れる場所にむき出しでさらされているものもあり、日常、身近な危険にさらされ続けています。加えて、広大な米軍基地の重圧を強いられ続けている沖縄県民の現状を考えると、6月23日、慰霊の日の持つ意味を、もう一度、考え直してみたいと思います。



平和の火



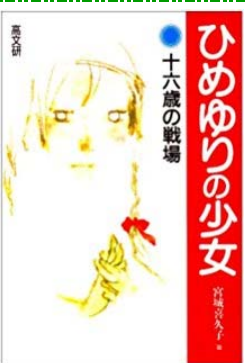
まぶに  
摩文仁の丘



※修学旅行の事前学習として、ぜひ一冊は読んでいこう。  
沖縄関連本は図書館にあります。



『白旗の少女』 比嘉富子  
太平洋戦争末期の沖縄本島の南部。この日本最大の激戦地で、逃亡の途中、兄弟たちとはぐれたわずか7歳の少女が、たった一人で戦場をさまようことになった。しかし、偶然めぐりあった体の不自由な老夫婦の献身で、白旗を持って一人でアメリカ軍に投降し、奇跡的に一命をとりとめた。この少女の戦場での体験をおった愛と感動の記録。



『ひめゆりの少女』 宮城喜久子  
沖縄戦開始の日の夜、「赤十字看護婦の歌」を歌いつつ陸軍野戦病院へと出発したひめゆり学徒隊。16歳の少女は、そこで何を見、何を体験し、何を感じ、何を思ったか。砲弾の下で3カ月、生と死の境界線上で書き続けた「日記」をもとに戦後50年のいま伝えるひめゆり学徒隊の真実。



『沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕』 石原昌家  
沖縄県本島南部にはガマとよばれる自然洞窟がいくつもある。半世紀前の戦争中にこのガマは避難壕として軍・民双方に使用されていた。本書に登場する「アブチラガマ」も「轟の壕」もそうした避難所のひとつだった。  
ガマでなにが起こっていたのか。裁かれざる「犯罪」は放置されたまま闇のなかに眠るのか。「洞窟の惨劇」が語られる。